

令和 5 年 10 月 24 日現在

機関番号：30105

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12969

研究課題名（和文）愛を基点とした西洋中世における情念論の系譜理解と情念の再評価のための試み

研究課題名（英文）An alternative overture to the genealogy of the theory of the passions in the medieval ages with a focus on the notion of love and an attempt to reevaluate the passions

研究代表者

松村 良祐（Matsumura, Ryosuke）

藤女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80612415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西洋中世の思想家が情念を扱う上で中心に置いた愛という情念を基点とした上で、未だ「未開の領域（terra incognita）」と言われることの多い西洋中世の情念論に光を当て、13世紀へと至る情念論の新たな系譜を提示することを目的とした。そこで、トマス・アキナスを中心とする13世紀の情念論を整理すると共に、従来の研究において見過ごされてきたサン・ヴィクトル学派の情念論に注目し、擬アウグスティヌスの『霊と魂について』を經由して、総長フィリップスやラ・ロシェルのヨハネスら13世紀初頭の神学者へと至る新たなルートの解明を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

13世紀における情念論はアヴィセンナの『魂について』やアリストテレスの諸著作を受容し、その影響下で成立したと理解されることが多い。そうした中で、本研究はサン・ヴィクトル学派から13世紀の情念論へと繋がる新たな系譜の解明を試みるのであり、西洋中世における情念論の系譜に対する従来の理解の再考を促すものであると言える。

また、人間の諸活動において果たす情念の役割が見直されようとしている現代の状況において、西洋中世における情念論に注目し、情念そのものの性格や情念相互の関係に関する基礎的な研究を行う本研究は、現代において情念を検討する上で問題提起と検討材料を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to shed light on the theory of passions, in particular, that of passion of love during the medieval ages. The study aims at the construction of an alternative genealogy of the theory into the 13th century. Contrary to the perspective presented by previous studies, where the contribution of the Saint-Victor school has been ignored, this study pays attention to the treatment of passions by Hugh of Saint-Victor and to elucidate, via the "On Spirit and Soul" of Pseudo-Augustin, a link to the early thirteenth-century theologians including Philippe the Chancellor and John of la Rochelle.

研究分野：西洋中世哲学

キーワード：情念論 愛 トマス・アキナス ボナヴェントゥラ サン・ヴィクトルのフーゴー

1. 研究開始当初の背景

(1) 西洋中世における13世紀へと至る情念論の系譜

古代哲学において、情念は哲学の主要的なテーマのひとつであり、ナスバウムやソラブジら英米圏の研究者を先駆けとして多くの研究者がその研究を積み重ねてきた一方で、中世の情念論の研究は、トマス・アキナスの情念論を中心として近年において関心が高まっている領域の一つである。ロンバルドやゴンドローによれば、『神学大全』第 I-II 部におけるトマスの情念論 (qq.22-48) は、西洋思想史上においてそれまでに情念を主題として書かれたものの中で最も長大な論考であり、質という点でもそれに匹敵するものは存在しないとされる。

とはいえ、こうしたトマスの情念論に注目が集まる一方で、その情念論の源泉や周辺の思想家に関心を向ける研究はまだわずかである。なかでも、2004年に刊行されたクヌーティラの『古代および中世哲学における感情 (Emotion in Ancient and Medieval Philosophy)』は、プラトンからオッカム、ヴォデハムのアダムら14世紀の神学者に至る情念論の思想的系譜を扱う労作であり、アリストテレスの諸著作やイブン・シーナーの『魂について』の受容とその展開をアルベルトゥスやトマスら13世紀における情念論の大きな源泉として捉えている。しかし、中世にはサン・ヴィクトル学派の情念論をはじめとする多様な情念論が存在し、13世紀の情念論が成立するに至るルートは単線的なものであるとは言い難い。そこで、13世紀に至る情念論の系譜に対してその一定の見通しを得るにあたっては、修道院神学をはじめとする多様な情念論に注目し、その系譜的な研究を行う必要があると考えた。

(2) 現代における情念の再考と西洋中世哲学との接続可能性

ところで、情念は哲学や倫理学の分野のみならず、知覚心理学や政治学、経済学を含めた多くの分野で論じられる重要な問題である。もっとも、大抵の場合、情念は個人や公共の秩序を攪乱し、その安定性を破壊する危険性を孕んだものとされ、理性や徳、利益によって制御されるべき対象として論じられてきた。

とはいえ、近年になってそうした情念の位置付けは見直されつつある。例えば、神経生理学者であるダマシオの説く大脳生理学の研究 (1997年、2002年) では、人間は「身体化された心」という視点をもとに捉えられるべき存在であって、そこで情念は適応システムの一つとして機能している。つまり、人間が向き合う個々の具体的な状況は、知性や理性による判断では時間が掛かり過ぎ、リアルタイムな反応が難しいため、知性や理性に代わり、情念がそれに対して「適切に」対応しているという。

しかし、「ダーウィンから130年余りを経過した現在においても感情研究は未だ一種のカオス状態にある」(藤田和生『感情科学』序 iii) と述べられるように、情念そのものの理解や分類、記述に関する統一的理解はいまだなされていない。そこで、人間の諸活動において果たす情念の役割が見直されようとしている上記の状況を踏まえ、西洋中世の情念論に注目し、その基礎的な研究を行うことは、現代において情念を検討する上での問題提起と検討材料を提供するものであると考えた。

2. 研究の目的

(1) 13世紀における情念論の特質と情念論の源泉に対する分析

西洋中世の情念論の系譜を検討するにあたって、トマスをはじめとする13世紀の神学者における情念論の特質を整理・分析する。ミショー・カンタンが述べるように、情念は13世紀になってようやく論じられるようになったテーマの一つであり、その先鞭はアルベルトゥス・マグヌスの『善について』やトマスの『神学大全』の内に見出される。もっとも、情念は欲望や喜び、悲しみ、怒り、憎しみなどを含み、情念論はそれ自体としても大きな広がりを持っている。そこで、中世の神学者らが聖書的な原理をもとに愛を全ての情念の中心に置いた上で、情念相互の関係を説明していることを踏まえ、愛という情念を中心として、トマスやアルベルトゥスら13世紀の神学者における情念論に対する考察を試みると共に、そこに流れ込む多様な源泉を浮かび上がらせることを目指す。

(2) 情念論の系譜に対する再考の促しと新たな系譜の解明

先に述べたように、13世紀における情念論はアヴィセンナの『魂について』やアリストテレスの諸著作を受容し、その影響下で成立したと理解されることが多い(クヌーティラ)。しかし、それを受容したトマスやボナヴェントゥラの情念論は、情念を生理学や自然学、魂論の枠組みの中で理解するアヴィセンナの理解とは異なる、人間学や神学というより大きな視点の中で展開され、そこにはクヌーティラが想定する以上に遥かに多い源泉が流れ込んでいる。実際、サン・ヴィクトル学派をはじめとする修道院神学の伝統において情念は愛を中心として盛んに論じら

れるテーマの一つである。そこで、個々の思想家の影響関係に焦点を当て、その詳細を検討していくことで、情念論の系譜に対する従来の理解の再考を促し、それに代わる情念論の新たな系譜や水脈を明らかにする。

(3) 情念の規範的性質についてのトマス・アクィナスとボナヴェントゥラの比較

ボナヴェントゥラによれば、情念は理性の下す判断にときに対立し、人間が至福へと向かうことを阻む「障害」として捉えられている。こうした情念の独立的なダイナミズムを脅威とみなすボナヴェントゥラの理解は、情念を個人や公共の秩序を攪乱し、その安定性を破壊する危険性を孕んだものとし、理性や徳によって制御されるべき対象とする通俗的な情念理解とその立場を同じくすると言ってよい。他方、トマスは情念と理性が衝突する可能性を想定しつつも、情念そのものの根本的な方向性に信頼を置く。つまり、トマスにおいて情念・理性・徳は本質的に一つに並べられる相補的なものと捉えられ、理性が何らかの行為を選択した際、情念は理性を「補助」することができる。そこで、両者における情念と理性の関係を手掛かりとして、人間の諸活動における情念の規範的性質を巡る現代的な問題と接続することを試みたい。

3. 研究の方法

(1) トマス・アクィナスにおける愛という情念に対する分析

まず13世紀の神学者、とりわけトマスの情念論に対する分析を試みた。愛を巡るトマスの思想の内に流れ込むアリストテレスからの影響は従来の諸研究において度々指摘されることである。しかし、愛の結果を主題とする『神学大全』第I-II部第28問題は、擬ディオニュシオスの影響を色濃く映し出すものであり、また、情念相互の関係に対するトマスの説明もサン・ヴィクトルのフーゴーにその先鞭がある。それゆえ、トマスの愛についての理解を手掛かりとして、13世紀における情念論の源泉を浮かび上がらせるにあたって、その背後に存在する多様な源泉を剔出することを試みた。

(2) サン・ヴィクトル学派から13世紀の情念論へと至るルートの検討

13世紀の情念論へと至る情念論の系譜を明らかにするにあたって、修道院神学の伝統に注目し、サン・ヴィクトル学派、特にサン・ヴィクトルのフーゴーの論考「愛の実体について」の分析を通して、そこに見られる愛・欲望・喜びという3つの情念の関係についての説明のモデルがその後、13世紀に至るまでにどのように受け継がれていったのかを検討した。もっとも、サン・ヴィクトルのフーゴーとトマスの間には相応の時代的な隔たりが存在している。そこで、その間隙を埋めるにあたって、12世紀後半に成立した擬アウグスティヌスによる『霊と魂について』や、13世紀前半に総長フィリップスによって著された『善についての大全』に注目し、その分析を通して13世紀へと至る情念論の系譜の解明を試みた。

(3) 情念と徳の関係を巡るトマス・アクィナスとボナヴェントゥラの対比的な分析

先に述べたように、情念と理性ないし徳の関係を考えるにあたって、トマスとボナヴェントゥラは明確に異なる立場に立っている。情念が理性に対して独立的に有する運動性は人間が徳を獲得する上での脅威になるとボナヴェントゥラは考えるのに対し、トマスは理性を助けるものとして情念に信頼を置いている。そこで、それらの関係を巡るトマスとボナヴェントゥラの理解の相違に注目し、その分析を試みた。ボナヴェントゥラ的情念論や徳論は、トマスに比べてまだ研究の進んでいない領域であり、ボナヴェントゥラに特に注目した。

4. 研究成果

(1) トマス・アクィナスにおける諸情念の中の愛の位置づけとその理解の源泉

愛を巡る用語法と日常言語の不在

『神学大全』の情念論(I-II, qq.22-48)において、トマスが愛を表す上で *connaturalitas* や *complacentia*, *consonantia*, *coaptatio*, *aptitudo*, *proportio*, *inclinatio* など多くの用語を用いていることは比較的よく知られている。しかしながら、これらの語は一見無造作に用いられているように見えながらも、それが用いられる対象や文脈、強調点に応じて区別され、その使い分けを通じて個々の愛の特性を的確に表わすことに成功している。さらに、愛を表す上での日常言語の不足という視点から考察し、これらの用語は、魂の内に生まれた最初の変化である愛という説明困難なものの内実を説き明かし、それにまだない言葉を与えようとする試みであることを明らかにした。

愛を巡る用語法を巡っては、シモナンによる古典的研究以来、『命題集注解』以降の発展史的な視点から考察したものが多く、そうした中で、トマスがそれらの用語を用いる背景に迫ることで、従来の研究とは異なった視点から考察を行うことができたことは、本研究の大きな成果であると言える。

情念としての愛における受動性と能動性

トマスの愛に関する記述のうちに見られる受動性と能動性という二つの性格は、ときに両立不可能なものとして考えられている。実際、クロウエはそこに断絶を見出し、それら二つの対立

的な性格はトマスにおいて説明困難なものとして未解決のまま残された課題であったと述べている。そこで、愛する者の心的態度に注目することで、これら二つの性格の調停を試みた。欲求対象が自身の希求する善として捉えられることで、欲求対象の働きかけを端初とする欲求の受動的な運動は、欲求自身の目的に適った自発的な運動へと転じることになる。愛する者の心的態度に関する分析の内に、これら二つの性格を両立可能なものとして説明することができる可能性を指摘した。

愛における新プラトン主義的要素：擬ディオニュシオスからの影響

トマスにおける愛という情念に対する理解の源泉を巡っては、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』や『弁論術』からの影響を指摘されることが多い。しかし、愛によって生じた諸々の結果を主題とする『神学大全』第 I-II 部第 28 問題に注目するのであれば、擬ディオニュシオスと関わりの深い合一や相互内在、脱我、張り合い、損傷（更には、溶解、享受、熱情、憔悴）といった語が並べられ、さながらこの第 28 問題は『神名論注解』に次ぐ「第二の注解」と呼べるほどに擬ディオニュシオスの影響を色濃く映し出している。脱我という事態がトマスの愛理解に占める位置付けを確認することで、トマスの愛理解に流れ込む新プラトン主義的要素の重要性を明らかにすることができた。

成果の公表

以上の内容は、「自己を越え出る愛のかたち - トマス・アクィナスにおける愛の諸結果の中の脱我 -」（京大中世哲学研究会、2019 年）、「愛を巡る用語法—トマス・アクィナスにおける『神学大全』1-2, qq.26-28—」（京大中世哲学研究会、2020 年）、「諸情念の中の愛—トマス・アクィナスにおける complacentia boni としての愛」（日本カトリック神学会、2023 年）においてそれぞれ発表し、その成果を公表した。また、“The Language of Love in Aquinas’s Theory of the Passions”として海外ジャーナルに 2023 年 1 月に投稿したが、現在も査読中である。

(2) 13 世紀へと至る西洋中世における情念論の系譜の解明

トマス・アクィナスの情念論の源泉としてのサン・ヴィクトル学派

始点から運動、終極へと至る自然学的な運動のプロセスをもとに個々の情念の関係を整理するトマスの説明を巡っては、アリストテレスの『自然学』からの影響関係が指摘されることが多い。しかし、そうしたトマスの説明やそれら 3 つの情念の組み合わせは、サン・ヴィクトルのフーゴーによる「愛の実体について」の内にも見出されるものであり、トマスの情念論の源泉は必ずしもアリストテレスに限定されるものではないことを確認することができた。

擬アウグスティヌス『霊と魂について』による橋渡し

しかし、サン・ヴィクトルのフーゴーの著作はボナヴェントゥラをはじめとするフランシスコ会の神学者らに馴染み深いものでありつつも、13 世紀の神学者らに広く浸透しているとは言い難い。トマスにおいてもフーゴーに対する直接的な言及はそれほど多いものではない。そこで、情念相互の関係に対するフーゴーの説明が 12 世紀後半に成立した擬アウグスティヌスの『霊と魂について』の内に見出されることを確認した上で、それが総長フィリップスやラ・ロシエルのヨハネスやヘルズのアレクサンデルらに活用されることで、13 世紀の神学者へと至るルートが存在していることを明らかにした。

13 世紀の神学者における情念論、とりわけ情念相互の関係に対するトマスの説明がサン・ヴィクトルのフーゴーや擬アウグスティヌスの内に見出されることはクヌーティラの研究によっても指摘されていたことである。しかし、12 世紀後半に成立した擬アウグスティヌスの『霊と魂について』が総長フィリップスやラ・ロシエルのヨハネスら 13 世紀前半の神学者らによって活用されていることを確認し、13 世紀へと至る新たなルートを追跡・整理することができたことは本研究の大きな成果であると言える。

成果の公表

以上の内容は、「サン・ヴィクトルのフーゴー『愛の実体について』」『キリスト教文化研究所紀要』第 22 号 (2023): 23-38 頁においてその一端を成果として公表した。上記はサン・ヴィクトルのフーゴーの「愛の実体について」の翻訳と解題であるが、本邦初訳である。

(3) 情念と徳の関係

情念と理性の関係

情念と理性の関係を巡って、トマスとボナヴェントゥラという 13 世紀の二人の神学者の理解を対比・検討した。情念と理性の関係に関するトマスの理解は、情念を理性の導きへと方向付けられたものとして捉え、それらを相補的な関係にあるものとして理解する点にある。こうしたトマスの理解は、アルベルトゥス・マグヌスの『善について』の内容とも一部共通するものであるが、アルベルトゥスはそれがアリストテレスの『ニコマコス倫理学』の問題圏の内にあることを指摘している。他方、ボナヴェントゥラは、情念は理性や至福に対する秩序付けを欠くものとして、徳に備わる脅威・障害として理解されていることを確認した。

情念の歪みを癒すものとしての枢要徳の有効性とその限界

ボナヴェントゥラにおいて、現世における人間の情念は治療を必要とする「歪んだもの」として捉えられている。そこで、初期から後期に至るボナヴェントゥラの著作を手掛かりとして、人間の情念の歪みや腐敗を治療するものとしての枢要徳の有効性とその限界に焦点を当てた。ジルソンの研究以来、1270 年代のラテン・アヴェロエス主義の進展とともに、ボナヴェントゥラ

は次第に哲学に対する警戒心を募らせたと理解されることは多い。そうした中で、ボナヴェントゥラが哲学者らの語る枢要徳が人間の現世的な生における有効性を終始認めていることを明らかにできたことは、本研究の成果であると言える。なお、この論点と関連して、中世哲学会におけるシンポジウム「枢要徳の形成と発展」を企画した。

成果の公表

以上の内容の一端は、「ボナヴェントゥラにおける枢要徳—『ヘクサエメロン講解』第6、7講解を中心に」(中世哲学会、2020年)において発表すると共に、「ボナヴェントゥラと枢要徳—『ヘクサエメロン講解』第6、7講解を中心として」『中世思想研究』第63巻(2021):65-73頁にその成果を公表した。

(4) 今後の展望

本研究は、西洋中世の思想家が情念を扱う上で等しく中心に置いた「愛」という情念を基点として、未だ「未開の領域(terra incognita)」と言われることの多い西洋中世の情念論に光を当て、13世紀へと至る情念論の新たな系譜を提示することを目的とした。そこで、サン・ヴィクトル学派に注目し、擬アウグスティヌスを通じて総長フィリップスやラ・ロシェルのヨハネスら13世紀前半の神学者へと至るルートが存在していることを明らかにすることができたことは本研究の一つの性かであると言える。

ところで、古代や近世を含めた西洋思想史全体における広義の視点からすれば、情念論はピベスやメランヒトン、デカルトをはじめとする16世紀の近世の思想家によって多く著され、彼らはその論敵としてストア派をはじめとする古代の情念論を念頭に置いていたと理解されることが多い。しかし、古代と近世の間には、情念に関する豊かな考察が残された中世という時代が横たわっており、それら中世の情念論が近世へとどのような仕方で受け継がれていったのかは今後において更に検討する必要がある課題であると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松村良祐	4. 巻 63
2. 論文標題 ボナヴェントゥラと枢要徳- 『ヘクサエメロン講解』第6、7講解を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松村良祐	4. 巻 22
2. 論文標題 サン・ヴィクトルのフーゴー 『愛の実体について』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 キリスト教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松村良祐
2. 発表標題 諸情念の中の愛—トマス・アクィナスにおけるcomplacentia boniとしての愛
3. 学会等名 日本カトリック神学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松村良祐
2. 発表標題 愛を巡る用語法—トマス・アクィナスにおける『神学大全』1-2, qq.26-28
3. 学会等名 京大中世哲学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松村良祐
2. 発表標題 ボナヴェントゥラにおける枢要徳 『ヘクサエメロン講解』第6、7講解を中心に
3. 学会等名 中世哲学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松村良祐
2. 発表標題 自己を越え出る愛のかたち - トマス・アクィナスにおける愛の諸結果の中の脱我 -
3. 学会等名 京大中世哲学研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関